群教セ	F09 - 01
	平16.224集

温かな人間関係を育む集団作りを目指して
――「ほっとルーム」委員会の立ち上げと機能の活用を通して――

特別研修員　　船戸　純子　（大間々町立大間々南小学校）

研究の概要

本研究では、「ほっとルーム」を不登校を予防するための予防的・開発的な取組を進める「ほっとルーム」委員会という組織と考えた。「ほっとルーム」委員会に「教師への援助の場」「一人一人のよさを見つける場」「情報発信・交換の場」の３つの機能をもたせ、活用する。この機能の活用を通して児童の対人関係能力や教師の協働意識を高め、温かな人間関係を育む集団を作り、不登校問題の予防的・開発的な取組を行ったものである。

【キーワード：教育相談　不登校の予防　温かな人間関係　「ほっとルーム」委員会】

Ⅰ　主題設定の理由

不登校問題への対応は、不登校児童や保護者への援助も大切であるが、児童が不登校とならない学校づくりや不登校児童を予防する開発的な取組が不可欠である。本校でも、不登校になるのではないかと懸念される児童や集団に適応できていない児童がどの学級にもいる。また、学校生活に順応しているように見える児童の中にも、不安や不満を感じながら生活している児童が見られる。児童は学校生活のほとんどの部分を学級の中で過ごしている。一人一人が自律的・主体的な行動ができ、対人関係能力が育成されて温かい人間関係が築ければ、学級の中でも自信をもって活動できるようになり、楽しく学校生活が送れると考える。

本校の児童は明るく素直で、思いやりがある子どもが多い。しかし、優しい気持ちをもっていても、友達の立場や気持ちを理解できなかったり、友達に自分の考えをうまく伝えられなかったりするなど、対人関係でうまくかみ合っていかない子どもも見られる。学級の中でも、友達と仲良く生活したいと思っているのに、対人関係スキルが身についていないために友達と積極的にコミュニケーションがとれなかったり、問題にぶつかるとどのように解決してよいかわからなかったりして、学級が一人一人の児童の支えとして十分に機能しているとはいえない。

また、本校では、学級児童の問題を担任が一人で抱え込み、対応していることが多い。生徒指導部会や職員相互の情報交換はきめ細かに行ってきたが、担任が学級集団や個々の児童の現状を開示して、指導方針や具体的な手立てについて共通理解を図った上で、他の教師が介入していくことは少なかった。

そこで、学級同士が開き合い、協力して子ども一人一人を育てられるような組織が必要だと考え、校内に「ほっとルーム」委員会を設けることにした。「ほっとルーム」委員会が中核となって、全学級が安心して自己表現できる場、めあてを持って活動できる場となるように個々の教師に援助できれば、学校全体が温かな人間関係を育む場となり、不登校の予防につながるものと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

「ほっとルーム」委員会を立ち上げ、学級経営の方法の支援をしたり、一人一人の良い面を見つけてプラスのストロークを送ったりして、温かな人間関係を育てる集団を作ることにより、

不登校予防を図る。

III　研究の内容及び方法

1　温かな人間関係を育む集団とは

「温かな人間関係を育む集団」とは、以下のようなものであると考える。

○　自己開示が自然とできる雰囲気になっている。

○　一人一人が対人関係スキルを学ぶ意欲をもって取り組んでいる。

○　相手の立場を考えて意見を言ったり行動したりして、互いに学び合い、認め合い、励まし合っている。

○　一人一人がその集団のよさを感じていて、活動に積極的に関わっていこうとしている。

2　本校の「ほっとルーム」とは

部屋を設置することではなく「ほっとルーム」を不登校を予防するための予防的・開発的な取組を進める組織と考え、「ほっとルーム」委員会を立ち上げる。この組織が教師同士をつなぐパイプになることにより、今まで担任だけで抱え込んでいた集団不適応児童への対応にチームで取り組んでいく。また、不登校児童が出てきた場合は、「ほっとルーム」委員会が中心となり、指導方針を共通理解した上で、「いつ」「だれが」「どのように支援できるか」を考え、チームで解決に当たる。さらに、学級同士を開き合って学級経営の方法を考えたり、情報の共有化を図って児童のプラス面を多様な視点から見つめたりする。このことによって教師の予防的・開発的な教育相談への理解や協働意識を高め、一人一人の児童を大切にした学級経営の充実を図る。そして、児童の学校生活の大半を占める学級が、児童にとって居心地のよい楽しい場となって、学校全体が温かな人間関係を育む集団となるようにしていきたいと考える。

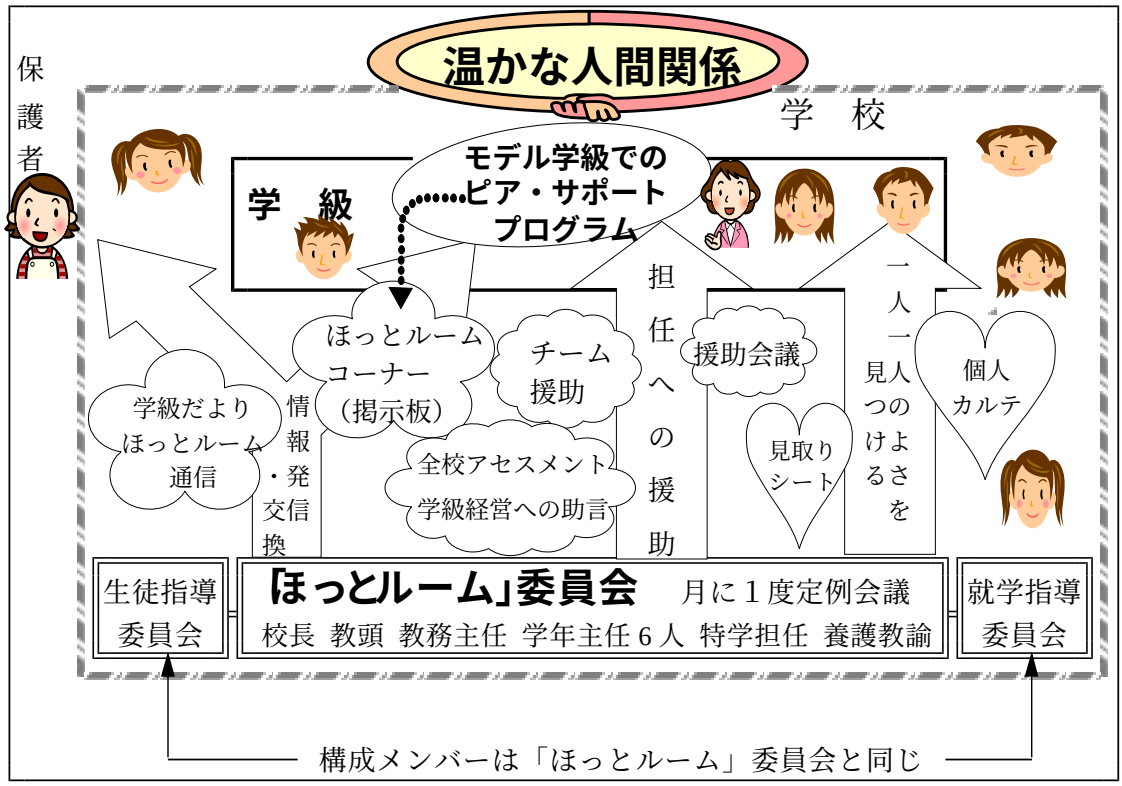

図１　研究構想図

３　「ほっとルーム」委員会の機能

(1)　担任への援助の場

「ほっとルーム」委員会で、各学級のアセスメントを通して学級を開き合い、各教師に向けて学級経営の援助をする。児童や保護者の悩みや問題を話し合ったり、不登校児童が出た場合にチーム支援をしたりする。

(2)　一人一人の児童のよさを見つける場

学級の中だけで児童を見るのではなく、クラブ活動、委員会活動、異学年交流等の場で一人一人の児童を全職員で多面的に見て、温かいストロークを送る。

(3)　情報発信・交換の場

「ほっとルーム」委員会を拠点として学級・学年・異学年交流等の場で温かな人間関係を育成するための工夫や実践について保護者や教師に向けて紹介する。集団に適応が難しい児童、不登校傾向の児童の情報を共有し、援助の場や児童のよさを見つける場での指導に生かす。

４　実施計画

月	「ほっとルーム」委員会	モデルとなる学級での主な活動
	○　委員会の立ち上げ	○　学級のニーズと児童の実態把握
6	第１回　「ほっとルーム」委員会	
	・１年間の活動計画作成	○　学級の実態を把握する調査（Ｑ－Ｕ）を実施
7	○　学級の実態を把握する調査実施	
	第２回　「ほっとルーム」委員会	○　調査結果から、学級の見立てを作成
	・調査結果から学級のアセスメントを実施し、方法を学ぶ。	
	○　全学級で学級の見立てを作成	
8	「ほっとルーム」研修	
	・全職員で学級のアセスメントを実施し、方策を考える。	○　学級の課題を見出し解決の方法を決める
	「ほっとルーム」研修	
	・対人関係育成のための研修	○　学級経営を充実させるプログラム作成
	○　学級経営の充実に向けて計画作成	
	○　個人カルテの実施	
9	第３回　「ほっとルーム」委員会	
	・不登校傾向児童への援助会議	○　プログラム実施
10	第４回　「ほっとルーム」委員会	○　学級での取組の様子を紹介
	・不登校傾向児童への援助会議	
	・情報交換・事例研究	
11	第５回　「ほっとルーム」委員会	○　学級での取組の様子を紹介
	・不登校傾向児童への援助会議	
	・情報交換・事例研究	
12	○　個人カルテ記入の啓発	○　学級実態調査・まとめ
	○　各学級で２学期の学級経営のふり返り・情報交換	○　係活動をパワーアップしよう
1	○　情報交換・事例研究	○　「総合の発表会」を成功させよう
2		○　６年生にお礼の気持ちを表そう
3	○　委員会の活動の成果と課題	○　１年間の学級経営のまとめ

Ⅳ　実践

その時点での課題　　対応策

1　実践の概要

月	「ほっとルーム」委員会の活動	モデル学級での活動
6月	○「ほっとルーム」の立ち上げ 部屋がないのにほっとルーム？ 部屋にこだわらなくても…学校が子どもにとってほっとする場となるように働きかける組織にしてはどうだろう いくつも委員会を作るのは…今あるものを生かせないか 生徒指導委員会をほっとルーム委員会にしては…	○学級のニーズと実態把握 児童の願い 楽しくて仲良しでしっかりできるクラスに 保護者の願い 人数が多くても、先生からたくさん言葉をかけてほしい 温かい人間関係を育てるために構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングをしていこう
7月	第１回　「ほっとルーム」委員会 ○　全校で学級の実態を把握する調査実施し、各担任が自学級の見立てを作成 クラスの実態を全職員に公開するのには抵抗が… 教師の力量をみるのではない「子どものため」ということを共通理解	実施したＳＧＥ　ＳＳＴ ・聖徳太子ゲーム・質問じゃんけん ・サッカーじゃんけん・今日のスター ・じゃんけん列車・おしえてください等 ○学級の実態を把握する調査（Ｑ－Ｕ）を実施し、「学級の見立て」を作成 ・このクラスをこうとらえました
8月	第２回　「ほっとルーム」委員会 Ａ学級をモデルとしてアセスメントの方法を学ぶ。 「ほっとルーム」研修（全職員対象） ・推進委員が中心となって各クラスのアセスメントを実施 「ほっとルーム」研修（全職員対象） ・対人関係育成のための研修 学級経営の援助と問題を抱えた児童への対応だけがほっとルームでいいのだろうか 一人一人の児童のよさを見てプラスのストロークをおくろう	・集団生活に必要な心やスキルが十分でない ・受けとめてほしいという思いが強い ・相互関係が十分育っていない 下学年の児童との交流で友達とのかかわり方を学ぶ。集団遊びを通してルールを守ることや協力する姿勢を身につけさせる。
9月	○　個人カルテの作成	○ピア・サポートプログラムの作成 ○定期的な集団遊びの計画

	新学期になって、登校を渋りがちな児童が現れた ほっとルーム委員会を開こう、	○プログラムの実施	
		自他己者理理解解	わたしはわたし（学活） ４つの窓（学活） もしもなれるなら（短学活） いいとこさがし（短学活）
10月	第３回　「ほっとルーム」委員会 不登校傾向のある児童に職員それぞれの立場で「いつ」「誰が」「どのように対応できるか」を考えより良い方法を検討し、指導方針を決める。	他者かとかのわり方	ふわふわ言葉とちくちく言葉(道徳) トラストウォーク（道徳） 言葉のプレゼント（学活） 元気の出る聴き方（学活） こおりおに(体育、集団遊びで継続) めざせ！楽しい交流会（総合）
11月	第４回　「ほっとルーム」委員会 不登校児童の指導の概要報告と指導方針の検討、各学級での取組についての情報交換	実の践場面	↓ １年生活「秋と遊ぼう」に招待されて
	・カルテの記入は負担に感じる ・場所と時間が必要 付箋でもメモでもよいことにすれば	か仲か間わとりの方	がんばったあなたへ（総合） 艦長をねらえ(体育、集団遊びで継続) 共同絵画（学級） 合わせアドジャン（短学活） たたかいおえて（体育）
12月	第５回　「ほっとルーム」委員会 不登校児童の指導の概要報告と指導方針の検討、各学級での取組についての情報交換 ・個人カルテの記入の仕方の例示 ・学級の情報交換 ・ピア・サポートモデルの実践を紹介	実践場の面	↓ 総合「昔の遊びを１年生に教えてあげよう」での取組
			○学級の実態を把握する調査（Ｑ－Ｕ）を実施　・まとめ

２　「ほっとルーム」委員会の活動

(1)　担任への援助の場

担任に対して下記のような援助を実施した。１学期の学級経営の様子や児童の学級満足度尺度から学級経営上の工夫を話し合う会議を夏休みと10月に実施。２学期からは、不登校傾向の児童が出たことにより、「不登校児童への援助会議」が中心となった。

担任への援助の内容
- 学級経営上の工夫や課題
- 不登校傾向児童への支援の方法
- 集団適応が難しい児童への支援等

ア　全校でのアセスメント・学級経営への支援

開かれた学級経営、教師間の協働意識の高揚を目指し、全児童に実施したＱ－Ｕの結果をもとにして、リーダーの進行のもとチームでアセスメントをした。

イ　チーム援助の実際

２学期になって、欠席が長期化する児童が出てきた。欠席の状況から学校では「不登校」と認識し、対応を進めることになった。「ほっとルーム」委員会では、担任一人が抱え込まないでチームで援助することを方針として話し合いを進めた。

(2) 一人一人のよさを見つける場

ア 「 個人カルテ」作成

日常生活の中から一人一人の児童のよさを見つけ、プラスのストロークを送ることをねらい、個人カルテを作成した。

資料１ 個人カルテ

観察の記録						平成　年度	
児童名		1年	2年	3年	4年	5年	6年
	担任						

月日	特記事項	記録者

資料２ 個人カルテ収納場所

全員の個人カルテは、職員室に置き、いつでもだれでも記入できるようにした。縦割り活動や異学年交流の場、委員会やクラブ活動、交換授業等で児童のよさを多面的に見た。実施していくと、カルテに記入する時間を確保するのが難しいという課題が出てきた。そこで、「見取りシート」を作成し、活動中に記入したものを添付できるようにした。

イ 異学年交流での多面的な見取り

複数の教師で見取りの視点を共通理解し、活動中の大勢の児童のよさや支援が必要な部分を多面的・客観的に見ることをねらって「見取りシート」を活用した。記入内容を活動の評価の参考にするとともに個人カルテにも添付できるようにした。

資料３ 見取りシート

見取りシート

活動名 ［　　］　　**記入者** 〔　　〕

見取りの視点

学年・組	氏　名	具体的な活動の様子	記載者

(3) 情報発信・交換の場

ア 「ほっとルーム」委員会での情報交換

モデル学級の取組等をたたき台にして「温かな人間関係を作るために学級で取り組んでいること」「学級経営上の悩みや問題点」についての情報交換を行う場を設定した。

２学期からは不登校傾向にある児童に対する情報交換が主な内容になった。学級経営の工夫の情報交換まで至らなかったので、コルクボードを使って情報発信する場を設けた。

資料４ ほっとルーム通信

イ 「ほっとルーム」コーナーの設置

個人カルテの棚の上にコルクボードを掲げ、教育相談に関する情報や学級経営の工夫を発信する場とした。

資料５ 「ほっとルーム」コーナー

掲示するもの

- 教育相談の資料
- 「今日はクラブがあるので、個人カルテの記入をお願いします」等の職員への連絡事項
- 人間関係作りについて載せた学級通信等

ウ　保護者への紹介・啓発

資料６　学級通信

各学級で通信を活用して温かい人間関係づくりの取組について発信した。モデル学級では、ピア・サポートプログラムでのトレーニングの目的や児童の反応等について保護者に紹介した。

保護者からの声

○　帰りの会の「今日のスターだ」は、日常的に友達のよさに目を向けられるようになるので、ぜひ続けて欲しいです。

○　人数が多くて元気のいいクラスなので、友達と仲良くなれるような取組はとてもいいと思う。

○　「言葉のプレゼント」でもらったカードを家で大切にしまい、ときどき見ている姿を目にします。友達と仲良くなれるための活動は、大切だと思います。

３　モデル学級での取組　（トレーニングは主なもののみ抜粋）

単学級で、人間関係が固定的になっているという実態から、仲間支援の対象を下学年や特学の児童に置き、ピア・サポートを学習モデルとする。ピア・サポートモデルとは、学級の児童の実態に基づいてトレーニング・プログラムを作成し、トレーニング→個人目標設定→実践→振り返りの円環的な過程を継続して、らせん的に実施していくものである。

	トレーニングのねらい・活動内容（実施場面）	スキルアップの場	児童の変容・課題から次の活動への見通し
自己理解・他者理解 ９月から10月	**４つの窓（学活）** 自分と同じ好みをもった友達や違う好みをもった友達がいること、また同じものが好きでもその理由が様々であることに気づき、お互いの理解を深める。	・学級活動の話し合い ・算数「問題解決の過程での話し合いの場」 ・帰りの会	算数の時間に同じ答えでも理由を話し合うことで友達の考えに興味をもてるようになった。その都度教師が子どもに返していくと、新しい考えの時に自然と拍手が生まれる。自分に自信のない児童が目立つので、「もしもなれるなら」「いいとこさがし」へとつなげていった。
	いいとこさがし（短学活２回） 友達のよさを積極的に見つけようとする気持ちをもつことができる。友達が見つけた自分のよさを知り、受け入れられる喜びを味わうことができる。	・国語「せつ明書を作ろう」 ・図工「鑑賞大会」 ・帰りの会の「今日のスター」	よさをたくさん見つけてもらえたことで「うれしい」という気持ちになった児童が多かった。「せつ明書を作ろう」の学習では、「いいとこさがし」で書いてもらった内容で説明書を書いた児童が多く、意欲的に取り組めた。小さなトラブルは日常的に起きる。次のステップの「他者との関わり方」へ移行することにした。
他者との関わり方 10か月から11月	**元気の出る聴き方（学活）** 教師のモデリングや友達との話し合いを通して、「元気の出る聴き方」「バリバリ元気の出る聴き方 」を考え、練習する。相手の話に注意深く耳を傾ける大切さに気づき、意識して聴こうとする気持ちを育てる。	・社会「スーパーマーケット見学」	モデリングを見てトレーニングすることにより、話の聴き方は理解できた。スーパーマーケット見学の時、お客さんに声をかけて質問したり聞いたことをメモしたりできた。授業場面で良い意見に拍手がでる。意見を聞いて「つけたし」「ちょっとちがう」等の反応も増えた。しかし、休み時間のトラブルは多い。優しい気持ちにする言葉・傷つける言葉に気づかせるトレーニングへつなげた。
	言葉のプレゼント（学活） 自分のよいところを知り、自己肯定感を高めるとともに、友達のよさを進んで見つけようとする気持ちを育成する。	・帰りの会の「今日のスター」 ・朝の会「言葉のプレゼント」	「〇〇君はまじめでよくはたらく人です。いつも落ちているストローのふくろを拾っているからです。」等、帰りの会でも事実に自分の気持ちを添えて、伝えていけるようになってきた。朝の会で毎日、友達を変えて「言葉のプレゼント」を贈った。この伝え方を１年生との交流会へつなげていけるように支援した。

1年生に招待されて	○　児童の振り返りカードより ・１年生なのにグループで協力したり、声をかけ合ったりしていたのがすごい。 ・「これいくらですか」ときいたらやさしく「５円だよ」と言ってくれた。遊び方をていねいに教えてくれたところも相手のことを思っているなと思った。 ・１年生だというのに自分から声をかけたり、感想を言ったら「ありがとうございます」と言っていた子がいて「あっ、これいいな」と思いました。 ○　教師の見取り 自分たちが楽しむことに重点を置くのではなく、「１年生のがんばりを見つけてプラスのストロークを贈ろう」とクラスの目標を意識して活動していたことが、振り返りカード等からとらえられた。全体的に緊張している様子で、声をかけたいのだが表現できない児童が目立った。各自に合った目標設定とグループで１年生とかかわっていくようにしたいと考え、「集団でのかかわり方」のエクササイズにつなげた。		**1年生に贈ったありがとうの花束」**
	ねらい・活動内容(実施場面)	スキルアップの場	児童の変容・課題から次の活動への見通し
集団でのかかわり方12月	協同絵画（学活） 言葉を使わずに友達の思いを察したり、自分の思いを伝えたりしていこうとする。この体験を通してグループ活動でも友達の意見や思いを読み取っていく活動に広げていこうと呼びかける。	・総合「昔の遊び」 ・朝の会 ・帰りの会 ・体育の準備運動	「友達が何を考えているか読み取ろうとした」という感想。帰りの会で日直が出ると、すぐに静かになれる場面が増えた。総合の時間には、話し合いの時に気持ちを読み取ろうとする児童も増えた。協力の仕方についてはまだ課題が多い。
	艦長をねらえ（体育・集団遊び） チームの仲間同士で役割を工夫することを通して、児童間のリレーション作りをし、協力して活動する気持ちを育成する。	・体育「ベースボール型ゲーム」 ・総合「昔の遊び」	「作戦タイムをとってから、みんなが自分の役どおり働いて、協力してやっている気がした」という感想。体育の時間も、「作戦タイムをとってもいい」と、その都度話し合う場面が見られる。意見がまとまらず、話し合い方については継続的な指導が必要である。
1年生に昔の遊びを教えてあげよう	○　児童の振り返りカードより ・みんなで協力してあんなにがんばるとすごいことができるんだとゆう気がわいてきます。みんなにやさしくしてあげられそうです ・一人でいる子をさそってあげたら「お姉ちゃん、楽しかった。ありがとう。」と言われてうれしかった。 ・「１年生が遊び方がわからなかったらやさしく教える」という目標を正直言って自分でよくやれたと思います。もう少し大きな声を出せたら１年生がよくわかってくれたかなというのが反省するところです。 ・しょうじょうがなくなった時にお手玉グループの○○ちゃんがくれてえらいと思いました。みんなで協力しようとしているんだな。 ・１年生でひとりでいる子をさそってあげたらその子が遊んで楽しそうな顔になったのが、うれしかった。 ・チームの子みんなで１年生を楽しませてあげてチームの力がひとつになってよかった ○　互いに贈り合った「がんばったね花束」より ・今日は、よくせつめいができていたよ。やればできるんだよ。 ・１年生をならべてくれたのに「なんでやるの。リーダーのわたしのしごとだよ」って言ってごめんね。私をてつだってくれたんだね。 ・今日は１日ささえてくれてありがとう。１年生がよろこんでくれてうれしかったね。 ・発表していたら自分のけん玉がこわれちゃったのに、○○ちゃんのをかりて発表してすごかったよ。がっかりしないでさいごまで１年生をよろこばせようとしたね。 ・発表を見るときに先生のかわりに１年生をならべていたね。すごいね。なかなかできないよ。		**がんばったね花束。**

	・１年生を大きな声でほめてすごくいいよ。遊びに来た１年生が多くてけん玉が足りなかったら、「この子とこの子でこうたいね」といったのがとてもいいよ。 ・○○ちゃんがぼうっとしていてどうしていいかわからなかったらやることをアドバイスしてあげたね。 ○　教師の「見取りシート」より（４人の教師での見取り） ・将棋のやり方が難しそうな児童に対して簡単な山崩しを教え、楽しく遊べるように工夫をしている姿が見られた。・１年生の子が移動しやすいようにならべたり、誘導したりしていた。 ・「賞状をもらえるからがんばってやてみようよ」と優しく誘っていた。・手を持ってやさしく教えていた。 ・１年生ができたときには「すごいね」とほめたり、手をたたいたりして一緒に喜んであげたりしていた。 ・発表の時に友達が次の技をしやすいように必要な道具を渡していてとても協力的だった。
まとめと今後の課題	学級の実態を見取り、「ほっとルーム」委員会でのアセスメント結果をふまえて、プログラムを組み、実施した。「１年生との交流会を成功させよう」のクラス目標に向かって、自分達にどんな力が必要かを考え、エクササイズを実施、振り返り、次の計画を立てるということを繰り返す事で、一人一人が「自分の目指す姿」を意識して活動することができた。これらの取組が、授業や休み時間にも生かされ、友達を傷つける言葉が少なくなり、クラスの人間関係が改善されてきたと考える。休み時間に一人でいることが多かった児童が、今は友達とも自然にコミュニケーションがとれるようになった。２回目のＱ－Ｕの結果は３名いた“要支援群”の児童がいなくなり、“満足群”の児童が増加した。２度目のＱ－Ｕ後のチャンス相談で、友達に自分の思いが伝わらずもどかしく思う児童や友達に言われた事を気にしている児童もいたので、日記やチャンス相談をさらに充実させ、一人一人へ心のサポートを進めていきたい。

Ⅴ　研究の結果と考察

「ほっとルーム」委員会を立ち上げ、その機能を活用することが温かな人間関係を育む集団作りを行う上で有効であったかどうかについて以下の点から考察する。

「担任への援助の場」としての機能は、全校で学級満足度調査（Ｑ－Ｕ）を実施し、その結果や担任の見取りをもとにアセスメントをしたことで学級を開き合い、学級全体の雰囲気や個々の児童の様子を共通理解することができた。さらに、担任に対して学級経営への助言や人間関係づくりの研修会を実施し、学級の課題を解決し、学級経営の工夫に役立てることができた。モデル学級では、このアセスメントと学級経営の援助をもとにして、ピア・サポートを学級の中に取り入れ、実施した。12 月に行った異学年交流の場では、力を合わせて活動に関わったり、相手の気持ちを考えて意見を言う等、互いに学び合い、励まし合う姿が見られたりした。児童の実態を考え、トレーニングを計画・実施し、そのスキルアップを図る場で評価する。そして、課題から計画を練り直してトレーニングを計画・実施していくという円環的な取組で行ったこのプログラムは、人間関係作りに有効であったと考える。「ほっとルーム」研修を生かした各学級での取組については、学級間に温度差が見られたので、アセスメント後の学級経営への援助を充実させていくことが大切であると考える。

「一人一人のよさを見つける場」としては、今まで担任が生徒指導上の問題があった場合のみに記入していた個々の記録簿を「個人カルテ」として、だれでも記入できる場に設置したことで、よい面についても目を向けていくことやプラスのストロークを送ることの大切さを、教師が意識することができた。モデル学級では、異学年交流の時に「見取りシート」を作成し、活動中に複数の教師で個々の児童のよさを見つけた。活動後、見取りシートをもとにして担任は個別に活動中のがんばっていた点を具体的に伝えた。児童は、自分の活動中の様子を教師が温かい目で評価してくれていたことで、「がんばったね花束」を贈る時に友達のがんばりを具体的に書くことができた。教師のプラスのストロークから児童は自己肯定感を持つとともに、

教師の言葉をモデルにしながら互いに認め合う温かな人間関係作りにつなげていった。今後は、個人カルテに記入する場や時間を確保して、全校で十分に活用していくとともにきめ細かな見取りができるよう、教師に意識付けをすることが大切である。

「情報発信・交換の場」としては、通信の発行と「ほっとルーム」委員会の情報交換を行った。モデル学級の学級通信には、人間関係づくりのエクササイズや異学年交流の様子を掲載し、保護者への啓発を図った。さらに配布する時には、児童に通信の内容や教師からのメッセージを伝えるようにしてきた。また、ピア・サポートプログラムのスキルアップの場で「ほめほめ大会」や「今日のスター」を設定し、児童が日常生活の中で見つけた友達のよさを個や全体に発信したことで、学級全体に温かい雰囲気が生まれた。学校全体への取組としては、「ほっとルーム」通信には、個人カルテの記入例やモデル学級でのピア・サポートプログラムの実践を紹介した。「ほっとルーム」コーナーには、各学級での実践や子どもの様子がわかる学級通信や教育相談の情報を掲示して学級や児童の様子を理解したり、支援の方法を学んだりして、学級で温かい人間関係を作っていくのに役立てることができた。不登校児童の情報については、「ほっとルーム」委員会を通して共通理解が図られ、チーム援助につながった。今後は、教員間でそれぞれの取組についての情報交換の活性化を図り、協働意識を高めていけるようにするとともに、保護者に向けても地区別懇談会・家庭教育学級等で広げていく必要があると考える。

VI　まとめと今後の課題

モデル学級では「ほっとルーム」で学級経営の支援を行ったり、一人一人の児童にプラスのストロークを送ったりしたことで、児童が友達との関わりをよりよくしていこうとする姿が見られ、安心して学校生活を送ることができた。最初は、自分の考えや思いを表現できなかった児童が、自然と友達と話ができるようになったり、困難にぶつかると登校を渋っていた児童も安心して登校できるようになったりして、不登校予防が図れたと考える。

学校全体としては、不登校の心配がある児童が出た時に「ほっとルーム」委員会で話し合いを持ち、指導方針やそれぞれの役割について明確にしてチーム援助をしたことで、担任が一人で抱え込むことなく対応でき、改善が見られた。「ほっとルーム」委員会でのアセスメントと学級経営へのアドバイスを実施して、学級経営の工夫を図れるように援助した。対人関係能力を高め、一人一人の児童が温かい人間関係を築けるように援助したことは、不登校の予防につながっていったと考える。

今後は、「ほっとルーム」委員会の組織化を進め、教師の意識変革を図って学校全体を温かな人間関係に満ちた集団にすることにより、不登校予防をさらに充実させたいと考える。

〈主な参考文献〉

・中野武房　日野宜千　森川澄男　編著　『学校でのピア・サポートのすべて』
ほんの森出版（2002）
・森川澄男　監修　『すぐ始められるピア・サポート指導案＆シート集』
ほんの森出版（2002）
・國分康孝　監修　『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』　図書文化(1999)
・河村茂雄　編著　『グループ体験による学級編成プログラム』　図書文化(2001)